Japa 2026 年 10 月 01 日＃79

JapaNewsletter（毎月 1 日発行）



INDEX

1. コラム：「問い」とは何か　答えを探す社会から、問いをつくり直す社会へ
2. 寄稿：6 年ぶりの香港で考えたこと
　（元鎌倉市文化担当課長・大河ドラマ担当、県立湘南高等学校臨時任用教諭 石川 雅之）
3. 解説：令和 8 年熊本地震　発災 1 ヶ月の記録が示すもの
4. 関連情報：時代のシグナル文献情報
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声
　• 第二の人生生涯現役で行く　その 17　（作詞・作曲家 高橋育郎）
7. つぶやき（編集後記に代えて）

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原靖典)による。

※　本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの Newsletter です。1 ヶ月後に当協会の HPhttps://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter に公開しています。

◇◆　令和 8 年熊本地震 1 ヶ月後報告書　◆◇

令和 8 年熊本地震（令和 8 年 7 月 28 日発生）について、発災から 1 ヶ月の時点で公表されていた一次情報および報道記録をもとに、将来、別の地域で同種の災害が起きた際に参照できる「実務記録」として報告書に取りまとめ、下記にて公開しました。

https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/entry/2026/09/19/230828

その概要を今月号の「解説」に掲載しています。

1. コラム:「問い」とは何か 答えを探す社会から、問いをつくり直す社会へ

（Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典）

最近、「問い」という言葉を、教育・経営・政策・生成 AI など、あらゆる分野で見かけるようになった。これは単なる流行語ではない。複雑化した社会では、何を問題とみなすかという「問題設定」自体が争点になる。「地域のバス利用者が減る」という同じ現象も、経営問題とみなすのか、高齢者の移動問題とみなすのか、都市構造の問題とみなすのかで、必要な政策はまったく異なる。答えを出す前に「これは何の問題なのか」を決めること自体が、避けられない作業になっている。

こうした発想は新しいものではない。ソクラテスは相手が当然と思う前提を対話で問い直し、デューイは違和感から仮説を立て、検証する過程を学びと捉えた。サイモンは「望ましい状態と現状との差」を埋める問題解決の型を確立し、20 世紀型の専門職に大きな価値をもたらした。しかし 1973 年、リッテルとウェバーは、都市計画や福祉のような社会問題を Wicked Problems（解決策と問題の定義が分かちがたく結び付いた複雑な社会問題）と呼び、問題の定義そのものが価値判断と切り離せないことを示した。ショーンはさらに進んで、専門家の仕事を「与えられた問題を解くこと」から「何を問題とみなすかを構成すること」へと再定義した。

国立国会図書館の NDL Ngram Viewer（デジタル化資料の語の出現頻度を年代別に示すツール）で「課題」「問い」など五語の出現比率を戦前から比較すると、「問い」は低水準のまま推移する一方、「課題」は 1960 年代以降に急伸し、他の語を大きく引き離している。「課題」を解く力で発展してきた日本社会が、いま「問い」へと重心を移しつつある。生成 AI が問いの候補まで大量に生成できるようになったことも、この流れを加速させている。人間に残る仕事は、どの問いを選び、何を根拠とし、誰が結果を引き受けるかという、より上流の判断である。

もっとも、問いは多ければよいわけではない。①重要性、②明確性、③前提の可視性、④開放性、⑤検証可能性、⑥多面的視点、⑦行為接続性、⑧更新可能性という、少なくとも八つの軸で点検しなければ、問いの数が増えるほど思考は拡散してしまう。事実の問いから原因の問い、問題設定の問い、そして価値の問いまで、一つの問いにも深さがあり、段階を往復しなければ実効性のある答えにはたどり着けない。

問題設定は中立ではなく、権力を伴う行為でもある。2025 年、米国のトランプ大統領が貿易赤字を「国家安全保障と経済への脅威」と位置づけ、追加関税を導入したように、何を問題とするかを決めることは、資源配分に直結する政治行為である。だからこそ、行政が示す選択肢をそのまま受け取るのではなく、市民が「そもそも、これは何の問題なのか」と問い返せるかどうかが、社会の質を左右する。

調査し提言して終わる組織は、採用されなくても「採用されなかった」で説明が済む。しかし実装まで踏み込む組織は、自らの問題設定が誤っていた場合、その責任を引き受けなければならない。例えば、孤独・孤立・ひきこもり等の支援現場に求められるのも、この責任を引き受けたうえで、なお問い直しを続けられる姿勢である。「正しい答えは何か」だけでなく、「誰が、何を、なぜ問い、その結果を誰が引き受けるのか」。「その問いで、本当によいのか」と問い返し続けることこそが、答えのない時代を生きる構えとなる。「問い」の深さは、「人間の価値」の深さをも問うている。

補:本コラムの詳細は https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/、バックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/column に掲載

2. 寄稿:6 年ぶりの香港で考えたこと

（元鎌倉市文化担当課長・大河ドラマ担当、県立湘南高等学校臨時任用教諭 石川 雅之）

旧聞報告となり恐縮だが、今年の年始、およそ 6 年ぶりに香港の地を踏んだ。

私にとって初めての香港は、まだ 30 代の頃だったから、今から約 40 年も前のことになる。当時はまだ英国領であり、何よりも「円」が圧倒的に強い時代だった。香港の物価も今とは比べ物にならないほど安く、若気の至りもあって、アルマーニの吊るしのスーツを購入してはしゃいでいた記憶が鮮明に蘇る。当時の街並みは、通り沿いの頭上へ競い合うように極彩色の巨大な看板が突き出し、それぞれの店が強烈にその存在をアピールしていた。多くの料理に容赦なく添えられていたパクチーの匂いも強烈で、一口目は恐る恐る口に運んだのも懐かしい思い出である。街全体に混沌とした賑わいと、溢れんばかりの勢いがあった。これこそが、沢木耕太郎が名著『深夜特急』で我々に熱っぽく伝えた香港なのだと、若き日の私は心を激しく湧き立たせたものだった。

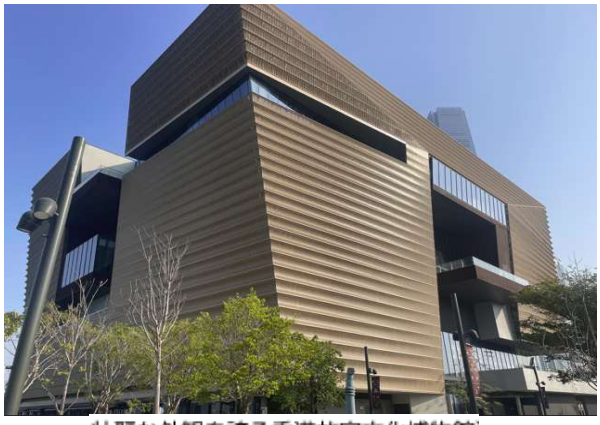
その後、1997 年の返還前に一度、返還後に二度訪れ、今回で 5 度目の訪問となる。今回の旅の主な目的は、近年めざましい開発が進む九龍の「西九文化区（ウエスト九龍文化地区）」の見聞と、すっかり綺麗に整備されているはずの九龍湾沿いの遊歩道「星光大道（アベニュー・オブ・スターズ）」の散策であった。宿舎には、交通の便が良い尖沙咀のザ・ロイヤル・パシフィック・ホテル＆タワーズを選んだ。

チェックインを済ませた後、まずは地下鉄で油麻地まで移動し、老舗の「興記菜館」で名物の土鍋ご飯を食べて夕食とした。帰路は地下鉄三駅分にあたる道のりを、街中を散策しながら徒歩でホテルまで戻ることにした。6 年前の面影を残す場所も散見されたものの、街の様子は劇的に変わっていた。きらびやかなブランド店がひしめき合い、観光客の数は以前にも増して圧倒的だった。そもそも、香港国際空港での入国審査からしてかなりの時間を要し、以前はここまで混雑していなかったはずだと、時代の変化を肌で感じることとなった。

一夜明けて二日目、早朝に宿舎を出て佐敦道まで朝散歩を楽しみ、目に留まった地元の店で熱々の朝粥をいただくことから一日を開始した。この日は、今回の旅の主目的である、九龍で今なお大規模な開発が続く西九文化区の散策が午前中の予定である。

この巨大な文化地区の整備には、スターフェリー発着場周辺の混雑緩和を目的とした、いわゆるオーバーツーリズム対策も視野に入っているのだろう。しかしそれ以上に、ここ数年間における中央政府の支配力強化という政治的な意図を、「文化」という美しく洗練されたベールで包み込むことで、さりげなく融和させようとする思惑が明白に見て取れた。最終的な完成形の情報を私は持ち合わせていないが、ここには驚くべき規模の文化ゾーンが形成されつつある。現在すでに開館しているコンテンポラリーアート特化型の美術館「M+」や「香港故宮文化博物館」の圧倒的な存在感は、今さら付言するまでもない。そればかりか、西九文化区の入り口にあたる角地に聳え立つ芸術劇場の壮麗な佇まいからしても、やがてすべてが整ったときに現れるであろうスケールの豪壮さ、もはやこちらの想像を絶するものになるはずだ。向こう 100 年は超大国として世界に君臨し続けるであろう中国の、細部を顧みない強権ぶりと圧倒的な巨大さには、ただただ溜息を漏らすほかなかった。北京の本館とどのように展示の棲み分けを図っているのかは詳らかではないが、香港

故宮文化博物館に並ぶ展示品の数々は、精緻・微細にして華麗、精度高く雄渾そのものであり、その美しさの前には言葉を失うばかりであった。


壮麗な外観を誇る香港故宮文化博物館


近代建築の粋を集め、圧倒されるばかりの「M+」

国家の威信をかけた巨大建築に圧倒され、呆然とさせられながら昼食を摂り、一度宿舎に戻って息を整えた。午後は九龍湾沿いの星光大道へと向かった。そこは文字通り「芋を洗うような」観光客の雑踏で溢れかえっており、その熱気に呑み込まれながらも、往年の香港映画スターの手形に自分の手を重ねてみたり、以前から変わらぬ佇まいで佇むブルース・リーの銅像を背景に記念撮影をしたりして、観光客としてのひとときを楽しんだ。


ヴィクトリア・ハーバーを背景に立つ
ブルース・リー像と星光大道


星光大道にて、映画スターの
手形に自らの手を重ねて

三日目は、対岸の香港島散策に充てた。尖沙咀での朝散歩の後、地下鉄で中環（セントラル）へ移動。そこから上環にある文武廟まで坂道を歩いて登り、参詣した。高層ビルの狭間にひっそりと佇むこの古刹は、日曜日ということもあってか、朝早くから熱心に線香を捧げて祈る人々の姿が非常に印象深く心に残った。

参拝後、周辺の人気店にできる長い行列を横目に、いくつかの老舗で土産物の購入を済ませて昼食をとった。中環の名所であるミッド・レベルズ・エスカレーターの周辺では、香取慎吾氏が描いた鮮やかな壁画アートの前でポーズを取ってみたり、往年の名画『恋する惑星』の登場人物よろしく、腰をかがめてアパートの部屋を覗き込むような仕草に興じてみたりしながら、現在は観光スポットとして再生されている監獄跡の歴史的建造物「大館（タイクン）」をひと巡りした。広大かつ堅牢な

その施設は私にとって初見参であったが、見学料を徴収することもなく、これほど広大な施設を維持・運用している香港当局、ひいてはその背後にいる中国の「太っ腹」な資金力と統治力には、ただ感心するばかりであった。



歴史の重みを感じさせる監獄跡の観光スポット「大館」

中環のマンダリン・オリエンタル香港に立ち寄って一息ついた後、一度ホテルへ帰着。少し休憩を挟んだ後、夕方は再び香港島へは戻らず、タクシーを利用して「古い香港の面影が色濃く残る」と言われる深水埗(シャムスイポー)へと足を延ばした。

なるほど、最新のガイドブックが謳う通り、街全体に漂う混沌とした雑然感、古びた高層ビルのベランダから何本も突き出た物干し竿に翻る洗濯物群、速度感ある露店や商店街の雰囲気は、私が 40 年以上前に初めて香港を訪れたときに体感したあの熱気にどこか似ていなくもなかった。しかし、その雑沓の中をテスラをはじめとする最新の電気自動車(EV)が音もなく滑らかに行き交う様子を見て、かつての「遠い過去の香港」はもうここには存在しないのだと思い知らされた。



古い香港の面影と近代的な高層ビル
が混在する深水埗の街並み

四日目の最終日は朝食後、ホテル前にある九龍公園を散歩した。街の真ん中でありながら豊かな木々に囲まれ、小規模な動物園まで併設されており、非常に気持ちの良い空間である。驚かされたのは、早朝から非常に多くの清掃担当者が熱心に働き、園内を塵一つないほど綺麗に整えている様子だった。翻って、「現在の東京や横浜に、これほど行き届いた美しい朝の風景があるだろうか」という疑問が頭をよぎり、胸中は何とも言えない複雑な思いで満たされた。この 4 日間の旅を通じて、私はそのようにして、あらゆる局面で「彼我(香港と日本)」を比較し続けていたことに気づく。

ここで少し数字を整理してみたい。香港の面積は約 1,050 平方キロメートルであり、これは東京都のおよそ二分の一、札幌市とほぼ同じ規模にすぎない。そこに暮らす人口は 734.61 万人(2020 年代統計)で、日本の愛知県や埼玉県と同程度である。すなわち、香港は面積・人口ともに東京都の半分ほどの規模なのだ。全体の人口密度は東京都とほぼ同等であるが、九龍の一部には東京 23 区を遥かに凌ぐ過密地域も存在する。このような単純な比較が統計学的に正しいかどうかは別として、数字の上では日本が大きく先行しているはずの差を頭では理解しつつも、実際にこの地に身を置くと、「東京、ひいては日本は、今や完全に香港に遅れをとっている」という強烈な印象をどうしても消し去ることができない。一体なぜなのだろうか。東京は、そして日本という国

は、かつての高度経済成長の成功体験に囚われ、常に世界のトップ集団にいることに甘んじ、慣れきってしまった結果、新たな技術や社会システムの摂取を怠ってきただけなのだろうか。

事実、街を行き交う EV 車の目につく割合を見ても、日本は確実に遅れをとっている。現在の東京では、香港のようにテスラ車が当たり前のように疾走する光景はまだ日常のものとは言えない（テスラ車が普及していること自体を近代化の絶対的な基準にすべきかは議論の余地があるが）。さらに、地盤や防災基準の違いがあるとはいえ、超高層建築の洗練された並び方やその密度も比ではない。道路の幅員や、新設された公共施設の圧倒的な規模感においても、もはや日本の都市は太打ちできていないように思える。マクロな経済指標の数字としては、いまだ東京や日本に及ばないはずの香港であるが、実際に走る車の新しさや施設の凄まじい規模を前にすると、こちらが完全に圧倒されてしまうのだ。

私は何か重大な勘違いをしているのだろうか。そう自問し、このように書き進めながらも、自分自身が抱いたこの「日本敗北」の印象が、何かの間違いであってほしいという可能性を完全には否定できずにいる。

なぜなら、街中で見かけた限りにおいて言えば、人々が一人ひとり身に纏っている衣服の洗練度や、特に若い世代のファッションセンスやスタイルなどは、東京や横浜の若者たちの方が遥かに優っていると感じられたからだ。しかし、その「見栄えの良さ」の裏側にある本質に目を向けたとき、暗澹たる思いが去来する。結局のところ、ほんの数年前に香港の若者たちが命懸けで見せたあの強烈な「反骨のエネルギー」は、中央政府の圧倒的な権力によって完全に制圧され、抑え込まれてしまった。香港の若者たちは、自らの手で自分たちの未来と居場所を創り出そうと、一時は死に物狂いで抵抗し、善戦した。しかし、残酷にも前世代の手によってその若き芽は摘み取られてしまったのである。

一方で、見栄えばかりが良く、小綺麗にまとまった東京の、そして日本の若者たちには、社会を揺るがすような精神のエネルギーの発露がいまだ訪れていない。容姿端麗で格好の良い彼らが、旧弊な社会に対して真に決起する日は、いまだ到来していないのだ。日本の若者は、1970 年代初頭まで続いた激動の時代を経て以降、文字通り国家や社会のシステムに制圧され、飼い慣らされたままの状態が続いているのではないか。いや、それどころか、あろうことか近年の世界的潮流としての保守化・右傾化の波にまんまと乗り、主体的思考を放棄したまま、アメリカ大統領にしなだれかかったり、公衆の前で軽薄に跳び跳ねたりするような女性首相（あるいは政治指導者）の姿を、熱狂的に絶賛し、支持しさえしている。そのような惨状を目の当たりにするにつけ、「彼らが覚醒するその日は、もう二度と来ないのではないか」という絶望的な予感が胸を締め付ける。いつまで待てば、この国の停滞は打破されるのか、その見当すらつかない。

しかし、それでも私は、いつか必ずその変革の時が来ると信じたい。日本の若者たちが、いつの日か旧世代の遺した歪んだ枠組みを完膚なきまでにぶち壊し、新しく先鋭的な取り組みを自らの力で実現してくれたなら、いま私が香港の地で体感し、打ちのめされている「彼我の差異」など、未来の笑い話に変わるはずだ。きっと、そうなると信じたい。香港の圧倒的なダイナミズムに圧倒されつつも、自国へのそんな儚い希望を必死に自分自身に言い聞かせながら、私は帰国の途についた。

補：本寄稿のバックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/professional に掲載

3. 解説：令和８年熊本地震　発災１ヶ月の記録が示すもの　（日本専門家活動協会 芝原靖典）

(1) 復旧の速さと、もう一つの現実

2026 年 7 月 28 日 16 時 27 分ごろ、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード 7.1 の地震が発生し、宇城市と氷川町で震度 7 を観測した。死者 38 人・行方不明者 1 人・負傷者 370 人あまり、住家被害は 4 万棟を超えた。数字だけを見れば、発災から 1 ヶ月は「順調な復旧」に見える。上水道の本管は 8 月 28 日までに応急復旧した。（新幹線は 9 月 18 日に全線で運行再開）

しかし、公的支援の入口となる罹災証明書の交付率は、発災 1 ヶ月後の 8 月 28 日時点で県全体 37.5%、震度 7 を観測した宇城市では約 10%にとどまった。

人的・住家被害

区分	8 月 31 日時点	9 月 9 日時点
死者	38 人	38 人者
行方不明者	1 人	1 人
負傷者	368 人	371 人
住家被害合計	36,246 棟	44,252 棟

補：罹災証明書の交付率（8/28 時点）：熊本市約 76%、八代市約 22%、宇城市約 10%（県全体 37.5%）

一方、被害の把握では、衛星やドローンなどの技術が発災直後から活用された（表 2）。

被害把握・情報収集における技術活用

主体	技術	使用場所・内容
JAXA	だいち 2 号（ALOS-2）・だいち 4 号（ALOS-4）	発災当夜から緊急観測を実施。ALOS-2 による建物被害推計データを熊本県へ提供（7/29～）
国土地理院	空中写真・干渉 SAR 解析・震源断層モデル	地殻変動（暫定）を即日公開、以後継続更新
防災科学技術研究所	震源インバージョン解析、強震モニタ（九州拡大版）	「防災クロスビュー：令和 8 年熊本地震」を発災当日に開設
陸上自衛隊第 8 師団＋JUIDA 加盟企業 2 社	ドローン（無人航空機）	イオンモール熊本の倒壊建物周辺で情報収集（7/29～）
大阪府警察	ドローンによる空撮	熊本県内の被害状況調査（7/30）
国土交通省九州地方整備局	ドローンによる被災状況調査班	甲佐町での被災状況調査に活用
熊本県警・消防	ドローンによる実況見分	日本製紙八代工場の煙突火災（9/3～）の原因調査に活用

(2) 最多の死者を出したのは「知られざる現場」

爆発事故で大きく報じられたイオンモール熊本（死者 7 人）より多い 9 人が死亡したのは、八代市の日本製紙八代工場における煙突倒壊であった。倒壊した煙突は敷地内の事務所を押しつぶし、協力会社の職員を含む 11 人が下敷きとなった。しかも倒壊を免れた別の煙突は、9 月 3 日の解体作業中に出火し、鎮火まで約 6 時間半を要した。地震そのものだけでなく、復旧・解体作業自体が新たな事故を生むという、二次災害の構造が見えてくる。

（3）制度の外側で機能した支援

総務省は、被災市町ごとに応援団体を１対１で固定的に割り当てる対口支援（たいこうしえん）方式を採用し、９月９日時点で延べ 28,012 人が派遣された。この背景には、８年前の西日本豪雨の際に熊本県から支援を受けた愛媛県が「そのご恩は決して忘れられるものではない」と述べて職員を送るという、都道府県間の互酬関係があった。海外からは 130 の国・地域と 19 の国際機関から見舞いが寄せられ（８月 17 日時点）、熊本に工場を持つ台湾 TSMC は２億 5000 万円の寄付を表明し、熊本と友好関係にある台湾南部の高雄市でも、同市選出の立法委員（日本の国会議員に相当）らが１ヶ月分の給与を被災地支援に充てる動きが広がった。高雄市も 1,500 万円を寄付した。公式の制度だけでなく、こうした関係資本（人や組織の間の信頼関係が生む支え合いの力）が、実際の支援を下支えしていたのである。

（4）密結合したシステムのリスク

熊本県内の部品工場の稼働停止は、地震の揺れをまったく受けていない遠方のトヨタ・ホンダの工場にまで生産停止を波及させた。TSMC の子会社 JASM の熊本工場は約１週間後の８月３日までに通常生産に戻ったが、自動車産業の停止はより長期化し、８月 19 日まで続いた工場もある。組織社会学者チャールズ・ペローは、構成要素間の依存関係が緊密（密結合）で、全体の挙動が予測しにくい複雑なシステムでは、想定していなかった経路で被害が連鎖すると論じ、これを「ノーマル・アクシデント」と呼んだ。今回の記録からも、この視点が読み取れる。

（5）生活再建支援の入口としての罹災証明

住宅を失った被災者への公的な金銭支援は、被害の程度と再建方法に応じて最大 300 万円が支給される被災者生活再建支援金が中心となるが、この申請には罹災証明書の添付が必須である。すなわち（1）で見た交付の遅れは、単なる事務の滞りではなく、被災者の資金計画そのものを先延ばしにする「入口の目詰まり」である。この遅れは平成 28 年（2016 年）の熊本地震でも教訓として指摘されており、10 年後に同じ課題が再発した事実は重い。オンライン申請の仕組みを導入しても、その先にある現地調査という業務の処理能力そのものが変わらなければ、交付率の改善にはつながらない。

（6）避難所という現場から見えた課題

避難者数は発災直後の最大 9,931 人から、９月９日には 1,838 人まで減少した。数字の上では収束が進んだように見えるが、全国の避難所に指定された小中学校の体育館等のおよそ７割には、そもそもエアコンが設置されていない（文部科学省調査）。真夏に起きた今回の地震では、この設備不足が避難生活を送る住民の健康を直接脅かした。熊本県はこの間、車中泊をしていた住民が熱中症の疑いで死亡したこと（災害関連死の疑い）も発表している。在宅避難者や車中泊者が、支援情報の届きにくい「見えない被災者」になりやすいことも記録しておきたい。

（7）次への教訓

他の自治体にとって重要なのは、避難所環境の整備も含め、個々の技術や制度の導入以上に、それを実際に動かす運用体制と、平時から蓄積しておく関係資本ではないだろうか。罹災証明の遅れという同じ課題が 10 年の時を越えて繰り返されたことは、教訓を「記録」から「制度」へと定着させる仕組みそのものが、次の災害への最大の備えであることを、はっきりと示している。

補：本解説の詳細は https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/、バックナンバーは https://www.japa.fellowlink.jp/column、

4. 関連情報：時代のシグナル文献情報

[時代環境]

- 2026/09/21　9 'boundaries' keep Earth livable. We've breached 7 of them　Andrea Thompson　Scientific American　https://www.scientificamerican.com/article/9-boundaries-keep-earth-livable-weve-breached-7-of-them/
- 2026/09/14　崩壊するリベラルな国際秩序 ―民主主義の後退がもたらす不安な時代―　地経学研究所　https://instituteofgeoeconomics.org/research/2026091401/

[時代構造]

- 2026/09/18　【提言】AI で生み出す時間をどう使うか　全職業・全タスク分析で見る仕事再設計　三菱総合研究所　https://www.mri.co.jp/knowledge/insight/policy/20260918.html
- 2026/09/17　技術革新と人類社会の未来 中間報告書―価値主導型イノベーション・ガバナンスに向けて―　経済産業省　https://www.meti.go.jp/press/2026/09/20260917004.html
- 2026/09/11　第 17 回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）　国立社会保障・人口問題研究所　https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou17/doukou17_gaiyo.html

[地方創生・日本創生]

- 2026/09/29　自治体間連携で行政サービスの供給力強化を―共同処理で職員不足を緩和、広域的な行政体制の検討も必要―　日本総合研究所　https://www.jri.co.jp/report/researchfocus/detail/17021/
- 2026/09/24　【提言】人口減少時代の地域レジリエンス　政策シミュレーションから見える、小規模自治体が「賢く縮む」ための必要条件　三菱総合研究所　https://www.mri.co.jp/knowledge/insight/policy/20260924.html
- 2026/09/11　経済はどこから縮むのか：人口減少下、地方小都市で加速する産業喪失と、職の東京一極集中　経済産業研究所　https://www.rieti.go.jp/jp/publications/nts/26e063.html

[孤独・孤立・Well-being]

- 2026/09/25　職場環境の過酷さと孤立・孤独感への対処　日本労働研究雑誌 2026 年 7 月号（労働政策研究・研修機構）　https://www.jil.go.jp/institute/zassi/backnumber/2026/07/pdf/065-075.pdf
- 2026/09/14 「関係性」からのウエルビーイングの設計―心理的安全性の先にある「頼りあい」の仕組み化―　野村総合研究所　https://www.nri.com/jp/knowledge/publication/region_202609/files/3_no034.pdf

[思惟・社会システム設計論]

- 2026/09/24　【論考】適正社会システムという考え方 ―人口減少時代の地方行政体制の再設計―　東京財団　https://www.tkfd.or.jp/research/detail.php?id=5054
- 2026/09/18　AI 時代の科学研究システムをどう再設計するか ―米国『Science: A New Golden Age』にみる AI for Science とメタサイエンス　科学技術振興機構 研究開発戦略センター　https://www.jst.go.jp/crds/column/kaisetsu/shortreport5.html

※特定テーマ・分野に係る情報のキュレーションの要望があればご連絡ください。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼連携団体の一般社団法人レジリエンス協会主催「2026 年 10 月定例会」のご案内

- 開催日時：2026 年 10 月 16 日(金)13:00～15:30
- 開催場所：日比谷図書文化館セミナールーム B ／ オンライン(Zoom)ハイブリッド
- 基調講演：一般社団法人地球社会レジリエンスセンター　代表理事　清水美香
- 参加費：無料
- 詳細及び申込：https://rrcj-japan-20261016.peatix.com/event/5194422?utm_content=3627033&utm_source=follow-organizer&utm_medium=email&sltid=0&dlvid=78798ddc-fbef-44fc-ae08-9dd7c4d6e16b&utm_campaign=pod-7454161

  https://resilience-japan.org/

▼Japa＆青山 Hicon 共同「研究会」の参加者募集の案内

- テーマ/名称：**ひきこもり等支援システム開発普及研究会**
- 共同主宰：Japa、青山 Hicon(青山ヒューマン・イノベーション・コンサルティング㈱)
- 設立・活動：20226 年 4 月設立。5 月より Zoom 会議にて毎月 1 回開催中
- 参加者：行政、支援機関、有識者、IT 実務者、その他　現時点の参加者数 23 名

  ※ 参加者歓迎：プロボノ、レベニューシェアで共創いただける当該分野の専門家・実務家、IT/AI エンジニア、社会課題解決関心者
- 参加申込：Japa 事務局

▼JapaNewsletter 掲載写真の募集

JapaNewsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。
掲載を希望する写真(著作権所有／フリー)がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。JapaNewsletter 編集仕様に則り掲載いたします。
ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼Japa Newsletter の「読者の声」の募集

Japa Newsletter に関する感想・ご意見、その他投稿を、随時、お待ちしています。

▼Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員(個人)と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。
Japa は、随時、会員[正会員(年会費 1 万円)、一般会員(年会費 3 千円)]を随時募集しています。

▸入会案内の詳細 https://www.japa.fellowlink.jp/admission

6. 読者の声

■ 第二の人生生涯現役で行く　その 17　　**(作詞・作曲家 高橋育郎)**

私のメールアドレスはシリウスです。

平成5年に、私は LVC の代表に奨められてパソコンを購入した。

アドレスを決めるため OCN の方がみえた。部屋に案内すると壁に額縁入りの絵がかけてあるのをみて「これは高橋さんが描いたものですか」と尋ねた。「そうです」というと答えると、振り返り机の上の壁に懸けてある額縁入り墨書をみて「これも高橋さんが書いたものですか」と聞いて、私がそうですというと「高橋さんは何をされているのですか」と聞いた。私は「作詞や作曲をやるほか、歌の指導をしています」というと「では、シリウスにしましょう」と言って、紙にアドレスを書きつけた。そして「シリウスは星の中で、一番明るい光を放っています」といった。私はシリウスを知らないので「ああ、そうですか」というだけで、それ以上の話はなかった。後日、LVC に顔を出すと「シリウスとは、すごい」と言われた。しかし、それ以上の話はなかった。

それから 25 年ほどたって、例の佐々木博子さんとお付き合いが始まった。彼女はシリウスのことを詳しく知っていた。

話によると、シリウスには星人がいて、地球上に人類が誕生したころ、地球に舞い降りて、人間に様々な知恵を授けたという。例えばエジプトのピラミットは、シリウス星人が知恵を授けたという。それから姿を隠して人間を助け、いろいろ逸話が残っている話をされた。

そこで私は出生時の奇跡を思い出した。母が産み月のとき、二階から落ちて、胎児の私は死んだものと思ったそうだ。それが生きて産まれたのだ。身体に損傷の後があったが、それでも生きて産まれたのだ。聞けばシリウス星人が、かばってくれたのではないかという。更にまだ、かたことしかしゃべれない前に歌を歌っていたという。そして歩き始めたころ、赤いゴム靴が好きで、履いては外に飛び出し、勝手に歩き回り迷子になって、近所の人から「赤いゴム靴の迷子の子」と言われた。

それからシリウスは龍が好きで、日本列島は龍に似ているから、シリウス星人に好まれて、早くから日本には来ていたとの事。そういえば埴輪は、どこか人間離れをした異形が多い。

といった話を聞いて、私が習わぬ作曲などやっているのは、シリウス星人の後ろ盾があると言われた。私は神の後ろ盾と思っていたが、シリウス星人だったのか。しかし、そうは言われても私は神様の後ろ盾を、やはり信じたい。

ところで私にとって面白いエピソードがある。

二十歳の頃に入った独身寮の同室の方が、大のクラシックファンだった。毎夜、床に入るとレコードを聴いた。私もそれを聴きながら眠りに就いた。

ある日、「私はベートーヴェンの生まれた日に生まれたのですよ。高橋さんの生まれは」と聞かれ「3月26日です」と答えると、彼は「あれー」と驚きの声を発し「その日はベートーブェンの亡くなった日ですよ」といって、愉快そうに笑った。

私はベートーヴェンが好きで、当時街には名曲喫茶があちこち誕生し、時間があれば入って、ベートーヴェンの曲が始まるとご機嫌った。ヤマハでは、この日を「音楽の日」とした。

童謡100年プロジェクト

平成26年2月「童謡100年プロジェクト」が発起人、星、中沢、渡邉の各氏によって始まり、私はここに招かれ、顧問を依頼された。そして、間もない4月に星、中沢氏と連れ立って、童謡協会へご挨拶に伺った。

ところが、残念ながら話がうまく伝わらなかった。協会でも同じ趣旨のことを始めようとしていた。それを一歩先んじて邪魔をされたと思われてしまった。そこで私は、白眼視された。人間ドラマには誤解から生じる悲劇があるのだと身をもって知った。

平成30年に西新宿で新年会を行った。そして7月に「童謡学会」に改名。浅草でプレス発表をした。理事長は三代目海沼実、副は中田幸子、名誉理事・山東昭子ほか 11 名、顧問5名となった。

さて、このように発展を遂げたものの、「法人を目指すのに会計報告がなされなかった」と指摘され、解体してしまった。そして、新たな会が始まり、私は中沢氏から誘われた。

それは、松本短期大学の「日本唱歌童謡教育学会」であった。

松本短期大学の「日本唱歌童謡教育学会」に入会

たしか令和元年だったか、中沢氏から電話があって「松本短大で唱歌童謡教育学会を発足させたので、入会しませんか」と誘われ入会した。山田真治教諭からも電話があって「高橋さんは、作詞や作曲、歌唱などで活躍しているから、特別に『芸術員』の称号にしましょう」と言ってきた。そして、東京でも決起大会を予定したところで，コロナ禍が始まって、大会は見送りになってしまった。その後、コロナ禍が5類になったころ、東京で会合が行われたが、私はあいにく前立腺がひどくなって、出かけられなかった。

私はメールで意見など具申している。　（続く）

7. つぶやき（編集後記に代えて）

大相撲秋場所で、横綱大の里が復活優勝し、涙した。史上最速で横綱に駆け上がった大の里が怪我をして、自信を失い、この 1 年間優勝できなかった思いが駆け巡ったのであろう。小さい頃から、横綱鏡里や栃若を見て育った世代としては、強い横綱の復活は嬉しい。しかし、大の里は横綱だから、休んでも番付が下がることはなかった。（一方で、引退は早まる）。大関以下は休めば番付が急降下する。大関以下でも、せめて 1 場所ぐらいは休める公傷制度の復活が必要なのでは。「本場所中の怪我」であれ「稽古中や日常生活での怪我」であれ、怪我は怪我である。怪我で番付が下がり、元の番付に戻るまでの間に、旬な肉体時期を失する。もったいないことである。力士が大型化し、ガチンコ相撲になった現在の大相撲にふさわしい仕組みに仕立て直した公傷制度の復活を願う。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典
発行元：Japa 日本専門家活動協会 http://www.japa.fellowlink.jp/
問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp